

## 特集企画

若い競技者の育成モデルをめぐる世界の動向

## 特集のねらい

近年、若い競技者の育成に関する議論が盛んになっている。関連する論文数もこの数年顕著に増加し、しかも研究内容に確かなパラダイムシフトがうかがわれる。

歴史的な文脈からひもとけば、1960～1980年代に旧ソ連、東ドイツをはじめとする東欧諸国で開発されたタレント発掘システムが成功モデルとして注目された。そして東欧圏の崩壊後、自由諸国での国家的な取り組みとしては、ドイツのジュニアからシニアまでの一貫育成システムおよびオーストラリアが2000年シドニー五輪に向けて行ったタレント発掘システムなどがよく知られる。この時代のタレント発掘育成モデルでは、若い時期に才能を見出し長期間にわたり一貫指導を行おうとするものであり、いわば早期専門化を積極的に奨励し、志向するものであった。

このような旧来のタレント発掘育成システムに対する評価としては、成功事例だけがその評価対象になっていたものの、科学的な評価は21世紀以降になってようやく始まった。それらの評価結果を概観すると、タレント発掘システムへの投資効果は意外に低く、ジュニア期からの育成がシニア期の成功につながっていない例が多い。他方、青少年や一般国民のスポーツ振興への波及効果は期待できず、両者が離反した構造になっているという。そうした反省から、若い競技者の育成を根本的に問い直す作業が始まりつつあり、そのパラダイムシフトが科学論文にも反映されている。

これまで、本紀要の特集では若い競技者の育成を中心的なテーマとして取り上げてきたが、今回の特集では改めてこのテーマの世界的動向に注目してみたい。そこで、特に注目すべき国や組織が中心となってまとめた文書4篇について、本紀要編集委員が分担して翻訳し紹介する。

まず、IOC 医科学委員会が若い競技者の育成に関して多岐にわたる分野を合意声明としてまとめた論文を紹介する（担当；伊藤静夫）。ただし、本論文は内容が広範囲に及ぶことから、特に若い競技者の育成方法に関するIOCの見解について解説した。

つぎに、ドイツ（担当；渡邊将司）の研究プロジェクトが自国の競技者育成に関する諸問題を議論した論文を紹介する。ドイツは、若い競技者の育成に関して長い歴史を有するが、本論文では、ドイツ代表選手を対象に世界トップクラスとそこまで到達できなかった競技者の違いを分析し、ジュニア期での専門化のあり方について新たな視点から議論され興味深い。

また、インターネット上に掲載された情報として、カナダ陸連（担当；伊藤静夫）及び全米オリンピック委員会（USOC）（担当；森丘保典）が提示している若い競技者の育成モデルを紹介する。カナダ陸連のモデルは、カナダ・スポーツ省が中心となって作成した長期競技者育成計画（LTAD）に基づくもので、すでに10年以上の実績を有する。一方、USOCは最近になってLTADを参考にしながら自国の若い競技者育成モデルを構築しており、この新しい動きにも是非注目したい。

若い競技者をいかに育てるかという課題は、日本陸連はもとより我が国スポーツ界全体が懸案とするテーマである。とりわけ、2020年東京大会へ向けての喫緊の課題でもある。残念ながら我が国では、この領域の議論が希薄であったと言わなければならない。今号の特集で取り上げた論文、資料を参考に、我が国でもこのテーマに関する議論が盛んになることを期待したい。

陸上競技研究紀要編集委員会  
編集委員長 伊藤静夫

＜特集企画＞ 若い競技者の育成モデルをめぐる世界の動向

目 次

若い競技者の育成方法を再考する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

－ 2015 年 IOC 合意声明から－

*International Olympic Committee consensus statement on youth athletic development.*

伊藤静夫

世界レベルで成功したドイツ選手の長期的な取り組み・・・・・・・・・・・・ 43

*Considering long-term sustainability in the development of world class success.*

渡邊將司

カナダ陸連の長期競技者育成計画 (LTAD) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

*Athletics Canada: Long Term Athletic Development.*

伊藤静夫

米国スポーツの再建に向けたアスリート育成モデル・・・・・・・・・・・・・・ 61

*REBUILDING ATHLETES IN AMERICA, American Development Model*

森丘保典